

サウンドインスタレーション作品《交流 2.0》(communication2.0)

－偶然性と人間界の中間地帯におけるコミュニケーション－

要旨

氏名：北村公人

本稿の目的は、拙作であるサウンドインスタレーション作品《交流 2.0》(communication2.0) の意義を明確化することにある。《交流 2.0》は、「現代において共同性を可能にするコミュニケーションを実現するためにはどうすれば良いのか」という問いのもと、ジョルジュ・バタイユの著書『内的体験』(*L'expérience intérieure*) の「交流」(communication) という章における〈横滑りの原理〉(*le principe du glissement*) に着目し、そのバタイユの思想を踏まえながら上記の問いへの解答を芸術作品として具現化した、参加型のサウンドインスタレーション作品である。本作品はバタイユの思想を参照しているが、バタイユの考える共同体にはコミュニケーションにおいて必要な「他者」が存在せず、コミュニケーションが成立しないという問題点がある。かつてバタイユとともに活動していた岡本太郎はこの問題点を自身の〈対極主義〉思想によって乗り越えようとしたが、岡本の思想がバタイユの問題点を乗り越えているとは言い難い。したがって、本作品ではバタイユと岡本太郎の思想の問題点を乗り越えた偶然性の世界と人間界の中間地帯におけるコミュニケーション論を芸術作品を通して展開する。そして、作品の鑑賞者に「普段我々が何気なく生きている現実世界は、あらゆる偶然性によって支配されており、人間は永遠に生きることもできず、他者とも切り離されている。そして、そこでは、人間同士の永続的な激しい衝突のダイナミズムがうごめいており、常にコミュニケーションは失敗する。人間はどうやっても不連続のままの存在であり、連続性を手に入れることはできないのだが、そのような引き裂かれの状態でもがき続けることが人生であるのだ」ということを喚起する。最初に、作品制作に至った経緯を素描する。次に、バタイユの〈横滑りの原理〉を総括し、バタイユの思想の「脱主体」の理論に対する問題点を指摘する。次に、バタイユの思想に影響を受けた岡本太郎の〈対極主義〉を総括する。その後、バタイユと岡本を乗り越え、バタイユの〈横滑りの原理〉を現代に通用するかたちで芸術作品という体裁で更新した《交流 2.0》の作品解説を行う。そして、最後にこれらの議論の小括を行う。